

Title	福澤先生の教育観
Sub Title	
Author	川合, 貞一(Kawai, Teiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.3 (1934. 11) ,p.1(347)- 24(370)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19341100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤先生の教育觀

川 合 貞 一

福澤先生の明治時代に於ける偉大なる教育家であつたと云ふことは、何人も異論のないところであらうが、先生は普通の意味に於ける單なる教育家であつたのではなくして、實に國民の教育家であつたのである。蓋し先生は、歐米列強の東漸の勢力に對して我が國の獨立を維持しようと云ふには、西洋文明を移植し、國民をして獨立自由の精神を養はしめるの他はない、即ち「一身獨立して一國獨立する」と云ふ根本的な見地からして、『學問のすゝめ』『文明論之概略』其他幾多の著書論文を發表して國民を指導されたのである。而して其の指導空しからずして、遂に燦然たる明治文化を作り出し、我が國をして世界強國の班に列せしめるに至つたのである。固より之を以て先生一人の功に歸することの出来ないの言ふ迄もないことであるが、然し先生の努力の與つて大に力のあつたことは否む譯にはゆかない。

ところで先生は教育そのものに就いて如何に考へて居られたであらうか。

二

世の一般教育家は動もすると教育なるものを以て萬能力あるものゝやうに考へ勝ちであるが、先生はさうではなくして、「教育の功能は世人一般の想像し豫期するが如く廣大なるものに非ず又不可思議なるものに非ず人生の能力は其先天の遺傳に存して際限あり教育は唯これを潤飾して本人の天然を發生せしむるに過ぎず」(福翁百話、七四。全集卷七、一五一頁)と考へて居られたのである。先生の能力遺傳の説には英のガルトンの影響が全くないとは云へなからうが、然し先生はガルトンの書を手にする前、既に人間能力の遺傳に就いて考へて居られたやうである。之れは「時事小言」に於いて述べて居られるところを見れば明かである。

「元來教育の主義に於ては人の天賦を平等一樣のものなりと視做して其能力の發達は教ゆる者の巧拙と學ぶ者の勤惰如何とに在るものとして獎勵することなれども是れは所謂誘導の方便なるものにして實際に於ては人の能力は天賦に存するを常とす或は不才の子にても之を教へて遂に有爲の人物たるの例なきに非ざれども甚だ稀なる例にして固より一般の事實を證するに足らず、人生の心身は正しく同一様のものにして心力の性質と身力の性質と相互に異なるなしとの事實は疑を容れざる所ならんされ

は天賦の身體に大小強弱あり、心の働にも亦大小強弱なかる可らず、此睹易き事にして古今識者の大に注意せざるは怪しむに堪へたり試に彼の相撲を見よ身體小弱なる者が何様に勉強するも關取りの段に上る可らざるは明々白白々にして番付の末段に居る小相撲を見れば竊かに之を憫笑するに非ずや、如何に牽強附會の説を作るも人の身體の強弱には天賦あり心の強弱には天賦なしとの口實はなかるべし畢竟世の教育家が其教育獎勵の方便の爲に事實を公言するを憚り遂に天賦論を抹殺して一般に之を忘れたるものなり、固より愚民多き世の中なれば無天賦論の方便も時としては可ならんと雖ども事實を忘れて之が爲に遠太の處置を誤るは憂ふ可きの大なる者と云ふ可し抑も人生の天賦に斯く強弱の差あるは決して偶然に非ず父母祖先の血統に由來するものにして草木の種子、魚鳥の卵、種馬、種牛等の事實を見て證す可し人類生々の理も之に異なるなきや明なり然るに世人は禽獸草木の種子を撰ぶを知て人類の血統に注意するもの尠なきは迂濶なりと云ふ可し余は多年此に所見ありて血統婚姻論の材料を集めて將に一書を著さんとする其際に當て偶ま英國の學士「ガルトン」氏所著の能力遺傳論一冊を得て之を閲するに先づ吾心を得たるものなり（全集五、四〇二―四〇三頁）

と。
先生は以上のやうに教育には天賦の制限があつて、如何にしてもこの制限を超えることが出来ないと考へられたのには相違ないのであるが、而もなほ教育の輕んず可からざるを十分認識されてゐたのであ

る。「福翁百話」の七十一にかう説かれてゐる。

人の能力には天賦遺傳の際限ありて決して其以上に上る可らず牛馬の如き其良否は二三歳のとき既に識別すること易しと云ふ人生も牛馬に異ならず彼の相撲の番付の末席に二年も三年も名を記されたる小男が關取に昇進は逆も望む可らず唯精神の働は無形にして身體の大小強弱を見るが如く幼少の時より其智愚を識別すること易からざるが故に世間の人が動もすれば教育に重きを置き人生學べば智なり學ばざれば愚なりとて唯教育の如何に存することと信じて恰も人力を以て智者を製作せんと欲する者なきに非ざれども是れは大なる間違ひにて人の子の天賦に智愚の程度あるは馬の子の良否に約束あるが如く力士の昇進に際限あるが如くにして苟も其の達す可きに達したる上は毫も其以上に出るを得べからず古人の言に上智と不愚とは移らずと云ふと雖も移らざるもの豈唯上下に限らんや中智中愚幾百千段の優劣は既に先天に定まりて決して動かす可らざるものなり然らば則ち教ふるも益なし教へざるも損なし教育却て徒勞なりと思ふ者もあらんかなれども是亦大なる間違ひにして世の中に人を教ふるほど大切なる事はなしと云ふも可なり其次第を語らんに教育は譬へば植木屋の仕事の如し庭の松も牡丹も其天然のまゝに捨置ときは次第に枝振りを悪くして牡丹の花も紅白の粧を失ひ時に或は蟲に害せられて枯凋む可き處を植木屋の手を以て枝を矯め根を培ひ四時の注意怠らざれば生氣充滿して光澤流るゝが如く之を他の野生のものに比較すれば色香の相違殆んど同種類の物とは思はれざる程に至る可

じされば今人の子を其生れたるまゝにして體育智育德育共に注意する者なければ其子の天賦如何に拘らず唯周圍の風に吹かれ時としては智徳の蟲とも稱す可き惡習慣に慣て心身の品格を失ひ概して粗野下等の匹夫匹婦たる可きに苟も此子をして天然の持前を空うすることなく其素質の全量を琢磨して光を放たしむるものは教育の功德と云はざるを得ず故に教育の要は人生の本來に無きものを造りて之に授くるに非ず唯有るものを悉皆發生せしめて遺すことなきに在るのみ如何に巧なる植木屋にても草木の天性に備はる丈けを見事に成長せしむるのみにして其以上に至りては何等の工夫もある可らず教育の事大切なりと雖も之に重きを置くこと其實に過ぐるは天下の通弊にして恰も教師の工風を以て人物を鑄治し出さんとする者なきに非ず畢竟人生の天賦遺傳に固き約束あるを知らざるの罪なり（全集卷七、一四六—一四七頁）

以上述べ來れるやうな遺傳と教育力とに關する先生の意見は随分早い時から懷抱せられてゐたものと見ることが出来る。と云ふのは、先生は明治九年十二月發行の民間雜誌第二十八號に掲載された系統論に於いて遺傳を論せられて居るし（續福澤全集第七卷、二五二—二五四頁）又明治八九年頃慶應義塾から刊行された雑誌か新聞に書かれたものと云はれてゐる教育の力と云ふ小論文に於いては天賦の能力には限りあること、教育は譬へば植木屋の仕事の如きものであるといふことを論せられて居られる（同上、

四二〇—四二一頁)からである。

かく先生は教育の天賦遺傳によつて制約されてながら、而もなほ其の働きの頗る大なることを信せられてゐたのであるが、教育の力は被教育者の一代に限らるゝものではなくして、遺傳の作用によつて後世子孫にも及ぶものとされてゐるのであるから、其の力は更に大を加へなければならぬ。先生は確かに一代に獲得されたものの遺傳を信せられてゐたのである。これ先生が士族の血統惜むべしとなし「今の士族の天賦に智徳の資を有して明に他の種族に超越する所以のものは一朝の偶然に非ず數百年來、家々の教育に遺傳し又其教育なるのも必ずしも文字に在らずして所謂家風に存するものにして他種族の得て知る可らざる所のものあり云々」(時事小言、全集卷五、四〇八頁)と言つて居らるゝ所以である。「福翁百話」の七十二にもかう言つて居られるのである。

穀物改良の要は種を選び培養を勤むに在り先づ良き種を蒔て丁寧に培養すれば前年の種よりも更らに良き種を得べし年々歳々怠らざるときは其進歩著しきものあるに反して最初良き種を得ても唯これを蒔くのみにして耕耘培養に注意せざるときは種の性質は次第に下りて之を回復すること容易ならず人間の子も亦斯の如し良き父母の子にして心身の素質屈強なるものにて唯これを生みたるのみにして教育に注意せざるか又は其教育法を誤るか又或は家道腐敗して悪習慣を成す等様々の不幸にて其子の品格を落し二代三代同様の割合に下落して四代五代に至れば初代の遺傳は全く消滅して薄弱暗愚の子

を生む可きのみ封建時代の大名又は富豪大家の子孫にして暗弱最下等の人に變じたるもの多きを見ても其實際を證す可し名家の子孫にして斯くの如くなれば無學文盲貧賤の子も亦この例を逆にして昇進の道あるや疑ふ可らず祖先以來一丁字を知らざる小民の子を教ふるは極て難事にして其身の一代に學業を成すが如き望む可らずと雖も兎に角朱愚以上の者を選んで多少の教育を授け次で二代目に至り又同様にして三代四代徐々に進んで止まざるときは恰も穀物の種の品位を進むると同様の約束に従ひ小民四世の孫に大學者を出すこと決して難からず唯その實效を奏すること速ならざるのみ之を醫學に徴するに彼の遺傳と稱する中風發狂結核癩病質（近時の醫說に結核癩病等は遺傳に非すと云ふも其感受の體質は遺傳と云はざるを得ず故に質の字を尾す）の如き其發病者の子孫能く注意して凡そ四代を経過して無事なれば先天の痕跡なきに至ると云ふされば智者の子孫が愚者とさるも愚者の子孫が智者に變ずるも病氣怪我等特別の場合を除き凡そ四代の歲月を要することにして隨分緩漫なるが如くなれども其漸進漸退の事實は争ふべからず而して其進退は唯教育の如何に在るのみ故に教育の功德は單に受教者の一身に止まらずして遠く子孫に及び社會全體の自然に進歩し又退歩するも其國に行はるゝ教育法の勤怠に關係すること明に知るべし（全集卷七、一四八—一四九頁）

先生はかう云ふ立場からして専ら國民の教育に畢生の努力を傾注されたものと云ふことが出来る。

三

上述の如く、先生は確かに教育なるものに重要性を認められたに相違ない。けれども國家があらゆる教育を一手に引受けて之を施すことには斷然反對せられたのである。其の理由を考へるに、凡そ左の三點に歸するものゝやうである。

一、子を教ゆるは父母の私情である。従つて子供を教育する責任は父母に在る。

二、政治は時に應じて其の宜きを制せなければならぬ。然るに教育は百年の長計である。この兩者を混ずることになると、思はざる弊害を生ずることになる。

三、國家があらゆる教育を引受けて其の費用を支出することになると、財政上の負擔に堪へないだけではなく學校の國家の經營は不經濟である。

四、私塾でなければ眞の精神教育は行はれるものでない。

第一の點に就いては先生は次のやうに論せられて居る。

子を教ゆるは父母の責任にして子を思ふの私情に出づるものなり之を教育して其成業を祈り何卒天晴の人物になりて立身出世せよと冀望すればこそ大切なる資産をも愛まずして子の爲めに費すことなれ其これを教へると教へざるとは一に父母の心掛け次第にて傍より妨ぐ可きにも非ず又助く可きにも非

す若しも之を助るとならば其人と人と相對の私談に任ずるのみにして是れ亦他人の與り知る可き限りに非ずされば一國の政府たるものは公共の資金を費して國民の私の教育を補助するの義務ある可きや否やと尋ねれば鄙見に於ては是れなしと答へざるを得ず在昔英國の學士ゼームス、ミルが其一子を督促して幼時より家庭の教育を嚴にし煩勞を憚らず金錢を愛まずして遂に育し得たるものはジョン、スチュアート、ミルにして天下有名の碩學を出し經濟政治の議論に於ては當代の時風を壓倒して之が爲めに英國は固より世界公共の利益を助けたること如何ばかりなるや知る可らず之を見たるゼームス、ミルの喜悅さこそならんと雖も其初めに嚴父が斯くまでの教育を與へたる本心は倅の身命を犠牲にしても國家の公益を計らしめんと目的なりしやと云ふに心中露ばかりも斯かる考の存せざりしは勿論、唯己れの子としては將來人にも笑はれず天晴の學者と爲りて自身の名譽幸福を全うせよと云ふの念願よりして苛嚴の教育を下したる其偶然の結果に依りたま〜世道人心を補益して絶倫の功績を立てたるのみされば父母の學を教ふるは天然の至情より出で、全く私の事なれども其私事の成績は以て天下公共の利益たる可し亦是れ人間社會の妙機と云ふも可なり（教育の經濟、全集卷九、三〇〇―三〇一頁）

と。
此處に先生は私の利益と天下公共の利益との間には微妙の關係が存してゐて、私の利益とすることが

やがて公共の利益となると云ふことを確く信じられてゐたことが判かる。が、若しさうであるとすると富者は其の子を教育することが出来るけれども、貧者は如何に其の子を教育しようとしてもそれが出来ないことになる譯であるが、國民の中に無教育の者の多數存在すると云ふことは當人に取つて不幸なるは固より國家に取つて不利益此の上もないことである。それを如何にしたらばよからうかと云ふと、それに對して先生は次のやうに答へられるのである。

然らば教育の事には一切政府の保護を下す可らざるやと問はんに我輩は否ならすと返答す可し勿論前記の格言（筆者註、「人民が私の目的にする其教育に公けの金を使用するは正則に非ず」といふ格言を指したものである）は犯し得べきに非ざれども又一方に國民無教育の弊惡を考ふる時は勢ひ捨置かれざるの情實ある可し蓋し國民に教なければ惡事を働き罪囚を促すと云ふやうなる考は別にしても人文漸く開くる今の世の人として名札も讀めず請取も書けざるの類にしては職業に有付く事も叶はずして衣食生活に路を缺き其當人の不幸即ち又一國の不幸と爲りて詰り公共の損害を致す可きが故に社會全體の安寧を計りたらば國民に多少の教育を與ふるの必要を看出すならん即ち此必要は前記格言の束縛を緩うするに隨分貫目あるの議論にして我輩は唯その無教育の弊惡を救治する程度を限りて假に政府の干涉を容るゝ者なり之を言換ふれば政府より費用を出して人民の私の教育を世話する限界は之をして普遍に讀み普遍に書き又聊か算術の心得あらしむるを以て足れりとするものなり（教育の經濟、

と。

さりとして先生はそれ以上の教育や學問の爲に公金を全然使用してはならないと考へられたものと云ふことは出来ない。何故かと云ふと、先生の持論では、當時の文部省若くは工部省の學校を本省から引離して一旦帝室の御有となし、更に之を民間の有志有識者に附與して共同の私立學校となさしめ帝室より一時巨額の資金を下附せられて永世保存の基本を立てるか、或は年々帝室費中から學事保護の爲に一定の額を賜はるかするがい、(學問の獨立、全集卷五、五八四頁參照)と考へて居られたゞけではなく、高尚な學理研究の目的を有する特別な組織を設けるが爲に國費を使ふと云ふが如きことには贊成である。さういふ事業は私人の力では出来ないことであつて、國家千百年の長計としてはどうしてもなくてはならない(同上、三一二頁參照)ものであると論せられてゐるからである。

第二の點に就いては先生はかう考へられてゐたのである。學問も政治も其の目的とするところは共に一國の幸福を増進しようとするものに他ならないのであるけれども、學問と政治とは異つたものであり、學者と政治家とは異つてゐる。と云ふのは、學者と云ふものは社會現前の實際には遠いものであるが、政治家と云ふものは日常人事の衝に當るものであるからである。さればこの兩者は混同さるべきではない。然るに若しその兩者が混同せられることになる、思はざる弊害を生ずることになると。かくて先

生は言はれるのである。

蓋し國の政治は……今日の人事に當て臨機應變の處分ある可きものにして……俗言之を評すれば掛引の忙はしきものなるが故に若しも國の學校を行政の部内に入るゝときは其學風も亦自から此掛引の爲に左右せらるゝなきを期す可らず掛引は日夜の臨機應變にして政略上に最も大切なる部分なれば政治家の常に怠る可らざることなれども學問は一日一夜の學問に非ず容易に變易す可らざるなり固より今の文部省の學制とても決して政治に關係するに非ず其學校の教則の如き我輩の見る所に於て大なる異論なし徳育を重んじ智育を貴び其學術大概皆西洋文明の元素に資て體育養生の法に至るまでも遺す所なきは美なりと云ふ可しと雖ども如何せん此美なる學制を施行する者が行政官の吏人たるのみならず直に生徒に接して教授する者も亦吏人にして且學校教場の細事務と一般の氣風とは學則中に記す可きにも非ざれば其氣風精神の由て生ずる源は之を目下の行政上に資らざるを得ず而して其行政なるものは全體の性質に於て遠年に持續す可きものに非ず又持續して宜しからざるものなれば政治の針路の變化するに従て學校の氣風精神も亦變化せざるを得ず學問の本色に背くものと云ふ可し之を要するに政治は活潑にして動くものなり學問は沈深にして靜なる者なり靜者をして動者と歩を共にせしめんとす其際に弊を見る勿らんとするも得べからず(學問の獨立、全集卷五、五七五―五七六頁)

と。

而して學問と政治の混同せられたところから生じた弊害の顯著な例として、近世の日本に於いては水戸藩に於ける正黨奸黨の騷亂を以てし、これは教育家にして國の行政に關かり、學校の朋黨を以て政治に及ぼし、政治の黨派論を以て學校の生徒を煽動し、遂に其餘毒を一國の社會に及ぼしたるものであるとして居らるゝのである。とにかく、學問を政治と分離するの必要なる以上、學問が政府の經營の下に在るの不利益なるは自から明かであると云ふべきである。

第三の點に就いては、先生はかう論せられてゐる。成程教育は大切なものではあるが、然し人民一般の生計如何を顧みると、今日一般教育費の負擔決して輕しと云ふことは出來ない。されば自分の所望を云へば、高等及び尋常小學の教育は擧げて之を私立學校に任して公費を用ふることのないやうにしたいものである。況んや之れ以上の教育に至つては、其の教育を受ける者が成業後學び得たるところのものを利用して立身の資となさうとするものであるから、いはゞ立身の投資に異ならない。而して立身なるものは純然たる私の利益であつて、其の利益は教育を受ける者に歸すべきものであるからして、公共の費用を以て學校を設け個人の私の爲に利益を謀るの必要を見ない（公共の教育、全集卷九、三一六―三二七頁參照）のみならず、費用の點に至つては官立と私立との間に著しい相違がある。凡そ今の官立の學校に費す資金の三分の一を私立の學校に與へたならば必ず同一の成績を擧げることが出來るとは殆んど學者社會の定論であるとする、國庫の負擔に依頼しなければならぬ理由はない（社會の形勢學者

の方向、全集卷十、二三九—二四六頁参照)
と。

第四の點に就いては、先生はかう考へられてゐたと云つていゝ。即ち教育に於て最も重きを置くべきは徳育であるが、徳育なるものは公立の學校に於ては實績を擧げることが不可能であると。それに就いて先生は次のやうに論じて居られる。

近日世上の教育論者が徳教の厚からざるを憂ひ天下の士人は次第に不徳に陥る可きの恐ありとて頻りに學校の教育法を改革せんとする者多しと雖も徳育の一點に至りては學校教育のよく左右す可きものに非ず家塾又は小私塾にて其塾主が直ちに生徒に接して教場の教の外に一種名狀す可らざるの精神を傳ふるものは例外として一般に公立の學校に於て公共の資格を持する教官が公席に於て私徳の事を語り以て徳育の實效を奏したるものは古來今に至るまで曾て其例を見ず蓋し公立の學校に入る生徒は元と學校の名を聞て入るものにして教官の徳を慕ふて之に従ふ者に非ざれば教官と生徒との間に師弟の親情ある可らず其公然たる資格を以て云へば教官の生徒に於ける猶ほ地方官の人民に於けるに彷彿たるものと云ふも可なり今の世に地方官の徳不徳を以て直ちに地方の人民に接しながら其一般の私徳品行を左右するに足らざること果して事實ならば教官が生徒に接して之を徳に導くも亦甚だ易からざるものと知る可し固より公立學校の教官に人物なきに非ず徳行の君子にして諄々よく少年を教る者少な

からずと雖も如何せん其君子も又少年も學校の規則内に運動するのみにして其規則なるものは教官の力を以て容易に左右す可きに非ず之を彼の家塾の主人が自から法を作て自から行ひ事の宜しきに適せざれば朝に作て夕に之を改むるも妨ぐる者を見ず師弟長幼相混同して一點の俗理を語らず悠悠々春風の暄なるが如くして不言の間に精神を傳ふるものに比すれば同年の論に非ず故に學校に依頼して德育の實效を奏す可きものは必ず家塾私塾に在て存すること疑を容る可らざるなり（德育餘論、全集卷九、二七五―二七六頁）

と。

先生は以上の理由によつて初步の教育以上は國家の經營に任すべきものではない。否、初步の教育と雖ども私人の經營に任すことが願はしいと考へられたやうに思はれるのであるが、若しさうなつた場合教育は衰微しはしないかと云ふ懸念あるに對して、先生はさる懸念は絶対に無用なりと考へられてゐたのである。而も其の理由は、凡そ天下の事物は人氣の赴くところに従つて盛衰するものであつて、國民一般が其の事の大切なるを知れば傍より之を促さずとも盛大になるものであるし、又商賣上の通則に於て品物の需要が其の供給を惹起すの例は少くない、従つて世間に學者需要の道を開きさへすれば學問の方向に嚮ふ者が續出するであらう（教育の經濟、全集卷九、三〇三―三〇五頁參照）と云ふのである。

四

先生は、世間に教育の大切なるを知つてより教育を餘りに尊重し過ぎるの結果其の弊を生ずるに至つたと云ふ議論あるに對して教育の過度恐るゝに足らずとして次のやうに論せられてゐる。

寒村僻邑に教育の普及を謀り所謂土百姓の子弟までも書を読み理を講ずるが如き始末に至りては文明は即ち文明ならなれども徒に子弟の氣品を高くするのみにして殖産の邊より觀察するときは却て不利の憾なきに非ず世界萬國の地理書を讀み倫敦巴里の盛なる事情を聞けば己が居村の狭くして穢きを知り教場に高尚なる物理を討論して器械の用法等を知るときは糞桶を擔で畑に出るの拙なるを悟る殊に新聞紙の如きは恰も少年の野心を教唆するの具にして之を讀んで意味を解すれば唯時事に心を奪はれて内に安んずるを得ず往々身の方向を誤る者多きは正に今日の事實にして憂ふ可きの甚だしきものなり若し此まゝに打捨て置きたらんには教育の進歩と共に農業その他の賤業に就く者は次第に減少して殖産上由々しき大事に至る可し畢竟教育過度の弊なれば何とか工夫なかる可らずとて竊に議論する者あるよし一聞或は然るが如くなれども實は決して然らず論者は今の田舎の少年輩が何か自慢らしく生意氣なるを見て其氣位の高きを教育普及の罪に歸するが如くなれども其實は正反對にして田舎少年の氣位高きは地方の教育未だ普ねからざるの明證として見る可きものなり凡そ世の中の物は數の少き

ほど人に珍重せらるゝの常にして學問も亦斯の如し今日の田舎地方は尙ほ舊幕府時代の田舎にして四十五十の老人に本法の教育を経たる者は甚だ稀れなる其無學社會に偶ま學校に學びたる少年輩が雜居すればこそ所謂無鳥里の蝙蝠、近郷近在に珍重せられて其氣位も自から増長することなれども少しも驚くに足らず今後二十年三十年を過ぎて今の少年が四五十歳の頃に至れば其時の後進生が生意氣に學問の事を語るも尋常一様として左まで珍重する者なきは必然の順序なり既に世間に珍重せられざれば百姓は百姓町人は町人にして銘々に家業を營むの外に渡世の道はある可らず唯その營業上に少しにて學問の思想あれば事物の道理を解するを易くして多少の利益ある可きのみ世間の教育普くして度に過れば人民自然に賤業を嫌ふなど云ふはあられもせぬ空想にして取るに足らず之を歴史上の事實に證せんに既往三百年の上に遡りて爾來人文の如何を視察するときは年々歳々進歩して止まず今人は既に已に教育過度の極點に達して日本國中復た賤業に就く者なき筈なれども曾て其事なきのみか人々の繁殖貧富の懸隔漸く著しきと共に賤民の數もまた漸く増加し或は其賤民等も教育の德澤に浴して知見を博くし賤業上自から利することある可きも其人員に不足を告げざるは斷じて保證する所なり畢竟するに人間の智愚は相對の語にして大智の社會に小智は愚なり今年の智者も數年後の愚者たる可し賤業果して愚民の事ならば人文の進歩に従て愚民の生ずるは際限ある可らず教育の過度毫も恐るゝに足らざるなり（福翁百話、全集卷七、一四九—一五一頁）

と。

此處に論せられてゐるところは恐らく一般教育に就いて、あつて、一般教育の水準の高まることは利こそあれ決して害になるものではないと云ふことであらうと思はれるのであるが、先生は身分不相應の教育は結局不平の人を作り、延いて社會の憂となると考へて居られたのである。先生はかう論せられてゐるのである。

國庫金又は地方費の如き公共の性質を帯びたる資本金を以て讀み書き以上高尚なる教育を助け貧家の子弟をして高尚なる學識を得せしむるは常に財を失ふのみならず其教育の成りたる上にて本人の心を苦しめ又隨て天下の禍源を醸すの掛念なきに非ず凡そ人間社會の不都合は人の智力と其財産と相互に平均を失ふより甚だしきはなし無學無識にして富貴の地位に居り其金力權力を誤用して一身を害し又社會に禍するの不幸は往々人の注目する所にして之を憂ふる者多きに拘はらず博學多識にして貧賤に居るの不幸も亦正しく之に同じと雖も動もすれば人の注意を遁るゝを常とす我輩の特に憾む所なり語に曰く知^レ字是れ憂患と蓋し人生文字を知り知識を研いて其身の憂き種子に爲る可き道理はなきに似たれども知字果して憂患と爲るは何ぞや他なし其知字者が身に得たる知識相應の地位を得ざるが故のみ故に知字は直に憂患の原因に非ずして其原因は貧乏に在りと云ふて始めて意味を爲す可し今我國の有様を見るに小學の教育甚だ高きにも非ざれども尙ほ且つ之に出入する童子等が父母の知らざる文字

を學び父母の解し難き議論を聽聞し自然に其氣位を高くして其郷黨に土民と群を爲すを樂まず漸く成長して四方に飛出さんと欲すれども家に一錢の餘財もなく朝夕不平を吞んで父母と共に田圃を耕す者なきに非ず此少年の知識決して非常なるに非ず唯僅に學問の初歩を窺ふたるまでの者なれども初歩は初歩ながらにして苟も之に相應す可き財産あらざれば初歩相應の苦痛あるものと知る可し左れば之より以上に上りて中學大學の教育に業を成したる者の心事は其高きこと如何ばかりなる可きや假令ひ空想の論理學に非ずして有形の物理を研究したる者にてても之を他に比して恰も精神の調子を殊にし茫茫たる宇宙無數の人を見れば平均して己が眼下に在らざる者なし腹中萬卷の書、胸裏絶倫の策これを繰り出して泉の湧くが如く彼の工業に此器械を用ひ、此商賣に夫の工夫を施し、建築は云々、土工は云々、道德の主義は斯くの如くにして、社會の改良は何より着手し、法律を如何して政治の精神を何れの方向に定るなど千種萬様の學者先生が千緒萬端の新案を案じ扱これを心に得て之を實に施さんとすれども先生本來無一物、僅に公共の補助を得て教育だけは卒りたれども工業商賣以下の事業、固より自力の及ぶ可き限りに非ずさればとて世上の景況を見れば所謂俗世界にして雅俗調子を殊にし此方より、求めて往く可らず、先方より來て求むる者もなし官途の如きは最も適當の地位なれども無限の學者に有限の椅子、最早周旋も行届き難くして結局閑散無爲の境界に居らざるを得ず、閑に居て生計の道なし其肉體の苦痛のみか多年の教育の辛苦學び得たる智識見聞は内に鬱閉し錐穎曾て囊を脱するを

許されざる其精神の不平不愉快は更に肉體の苦痛よりも甚だしく煩悶憂鬱に堪ゆ可らざるなり然り而して此鬱憂や靜に内に鬱する其間は一人の苦痛に止まると雖も發して外に現はるゝに於ては亦自から社會の憂たるを免かれず其事例は古今内外の歴史に見る可きもの甚だ多ければ我輩が特に爰に記さゞるも讀者の自から想起する所ならんされば此學者の流が上等の學問教育を被りたるが爲めに一身を苦しめ又隨て社會の憂を爲すは其罪決して學問に在らず學問は則ち眞實有益有用の學問にして之を利用すれば其功能少なからざるものなれども唯その學問の深淺と本人の身の貧富との間に鈞合を得ずして折角の學問も却て不幸の媒介を爲すものと云はざるを得ざるなり（教育の經濟、全集卷九、三〇九—三一頁）

先生は此處に現下重大なる社會問題となりつゝある高等の教育を受けた者の過剰の結果を既に豫見して居られたものと云ふことが出来る。

五

以上は教育を制約する條件、學校の施設、教育の結果等に關する先生の意見を明かにしたのであるが、然らば先生は教育其物をば如何に考へられてゐたかと云ふと、先生は教育なるものを以て單に事物を教

へるのではなくして、本來具はれるところの能力を發達させるに在るとされたのである。先生はかう言つて居られる。

人生の事柄の繁多にして天地萬物の多き、實に驚くべきことにて其數幾千萬なる可きや之を知る可らず唯その物名のみにても悉く之を知る者は世にある可らず然るを況んや其物の性質をや悉く之を教へんとするも逆も人力に叶はざる所なり人間衛生の事なり活計の事なり社會の交際一人の行狀小は食物の調理法より大は外國の交際に至るまで千差萬別無限の事物を僅々數年間の課業を以て教ふ可きに非ず學ぶ可きに非ず假令ひ其一部にても之を教へて完全ならしめんとするときは却て其人の天資を傷ひ活潑敢爲の氣象を退縮せしめて結局世に一愚人を増すのみ今日の實際に於て其例少なからずされば到底繁多なる事物を教へんとするも出來難きことなれば、果して世に學校なるものは不用なるやと云ふに決して然らず固より直接に事物を教へんとするも出來難きことなれども其事に當り物に接して狼狽せず能く事物の理を究めて之に處するの能力を發育するは隨分出來得べきことにて即ち學校は人に物を教ふる所に非ず唯其天資の發達を妨げずして能く之を發育する爲めの具なり教育の文字甚だ穩當ならず宜しく之を發育と稱す可きなり（文明教育論、全集卷九、三三九―三四〇頁）

而してかう云ふやうに學校の本旨は所謂教育に在るのではなくして、天賦の能力を發育させるに在

る。かういふ標準を以て世間に行はれてゐる教育の實際を見ると、全く此の本旨に違つてゐると云ふのである。

六

先生の教育に對して懷抱せられてゐた意見は大體以上の點に盡きると思ふのであるが、其の意見を見ると、一面を高調すると同時に他の一面を顧慮することを常に忘れなかつた先生一流の用意を此處に於いても容易に看取することが出来ると思ふ。固より先生は時と場合によつては唯、事の一面のみを高調せられたことがなかつた譯ではない。けれどもそれは何等かの臨機の必要上さうされたまでであつて、必ずしもそれを以て事の全體を盡したものと考へられてゐたとするには出来ない。そはとにかく、教育を考へるに方つても天賦遺傳の制約を考へると同時に教育力の働きを考へ、教育の等閑にすべからざるの道理を説かれたのである。この點に就いては何人も異論のないところであらう。

教育なるものは國家の施設に待つべきものなるや、或は私人の經營に任すべきものなるやに就いては、立場の相違によつて如何やうにも論せられるであらうが、言ふ迄もなく先生は英國流の個人主義思想の影響の下に之を全く父母の私情に任して差支なしと考へられたのである。而もなほ世間に一步を譲つて初歩並に最高等の教育とを除いて其餘は私人の經營に任すべしと説かれるに至つたものと云ふことが出

來る。官尊民卑の氣風の盛んなる時代に於てかゝる意見を主張せられたのは頗る大膽であつて、先生ならでは恐らく出來得なかつたことであらう。惟ふに教育なるものも國家の統制の下に立たなければならぬのは言ふ迄もないことであるが、而も教育そのものの性質上、私人のイニシアチヴに待つことの尠なからざるを以て見れば、先生の主張にもたしかに一應の道理あることを思はざるを得ない。殊に先生が德育の點に至つては政府の學校のよく爲し得るところにあらずとせられてゐるのは、頗る傾聽すべき意見と云はなければならぬ。國家の教育制度が立派に出來上つてゐる今日、學校に於て人物の養成は不可能であるとの理由を以て、小私塾の隨處に起りつゝあるの事實は一體何を物語るものであらうか。これつまり先生の意見を裏書するものに他なるまい。官公立の學校を悉く私立に移すの如何はとにかくとして、如何なる學校であつても人格教育上これを私塾化する必要があると云ふことは言ふまでもないことであらう。然るに私立の學校に於いても多數の學生を收容するに従ひ益々官公立化しつゝあることは頗る遺憾とせざるを得ないものがある。

若しそれ教育より生ずる弊害の説に至つては、一方に於て教育の振興を圖ると同時に、他方に於て教育を抑制せんとせられたものであつて、其の今日あるを既に豫見せられてゐたものと云ふことが出來やう。惟ふに目下所謂思想問題の八ヶ間敷くなつたのは種々の原因があるには相違ないが、而も其の主なものを覓るならば、結局教育あるものの就職が困難であつて適當の職を得ないものが世間に尠くない

と云ふ事實に在ると云はなければなるまい。これ先生の所謂身分不相應の教育は當人の不幸であるばかりでなく、延いて社會の憂となるものに他ならない。かの獨逸のナチスの如き必ずしも先生の説れたやうな理由からではないであらうが、とにかく近來大學生の數を制限するの政策を取りつゝあるのである。世間が教育に夢中になつてゐた其の際に、先生は獨り教育より起り來る弊害を説かれつゝあつたのである。誰かその先見の明に驚嘆しないものがあらう。

最後に先生が唯知識を注入するに止まる教育上の唯物主義マテリアリズムを排して能力發育主義とも云ふべきものを主張せられたのは、確かに我が一般教育界の通弊を喝破せられたものであつて、教育家頂門の一針であると言はなければならぬ。

之を要するに、先生の教育觀は時に一面を高調され過ぎた點がないではないが、而もなほ生きてゐる多くのものがある。世間の學者教育家が之を熟讀翫味すれば教育上益を享けるところが尠くないであらう。